

〈書評〉

アントワネット・B. ブラックウェル著
小川眞里子・飯島亜衣訳

『自然界における両性——雌雄の進化と男女の教育論』
《叢書・ユニベルシタス936》

(法政大学出版局 2010年 x, 208頁 ISBN 978-4-588-00936-5 2,500円+税)



横山 美和

歴史学一般に言えることではあるが、特に科学史研究においては、偉大な業績を残したとされる男性が研究対象として取り上げられることが多い。女性に関しては、マリア・シビラ・メリアンや、エミリー・デュ・シャトレのように、たとえ同時代には科学に携わる知識人女性として名を馳せていたとしても、科学史に名を残すことは稀であった。例外は、マリー・キュリーくらいであろう。しかし、欧米においては特に1960年代からのフェミニズムの影響により、L. シービンガーの初期の仕事である『科学史から消された女性たち』（1989, 邦訳1992）に代表されるように、埋もれた女性の科学者や自然哲学者、科学論文翻訳者を掘り起こす作業が精力的に行なわれるようになった。そうした科学史批判は、近代科学や主流科学史の男性中心主義を実証的に裏づけ、フェミニズム科学論の深化を促した（小川2001）。

本書は、1875年にアメリカで刊行された*The Sexes Throughout Nature*, New York: G. P. Putnam's Sons (reprint edition, Westport, Con.: Hyperion Press, Inc., 1976) の翻訳である。著者であるアントワネット・ブラウン・ブラックウェル (Antoinette Brown Blackwell, 1825-1921) は、チャールズ・ダーウィンやハーバート・スペンサーの進化論のもつ男性中心主義を批判した人物としてフェミニズム科学論で度々取り上げられる人物である。しかしながら本書を通読すると、単に男性中心主義を批判しただけでなく、新しい発想による進化論解釈を打ち出していたことがわかる。ブラックウェルは米国で女性を初めて受け入れた大学として有名なオベリン大学を卒業後、神学を学び、会衆派の教会において米国初の女性牧師として1853年に叙任されている。しかしながら、キリスト教の教義として一般に女性は公の場などで発言することが戒められており、女性牧師に対しての反発や旧来の教義に対する葛藤から、ブラックウェルは体調を崩し、一年たらず教会を去ることとなった。彼女の親友であり女性参政権運動のリーダーであったルーシー・ストーンなどは、教会は女性の権利に敵対的であると捉え、距離を置いた (Murphy 1991, p. 186)。だが、著者は女性を劣位に置くような聖書の教えを再解釈し、女性の公の場での発言を認めよ、とする布教活動を行なった。

宗教家であった彼女が進化に関する科学的論考を書くことができたのは、進化や自然選択を含めた自然に対する神の設計意思の存在を信じていたからである。神が両性を平等に保っているという信念のもと、進化論や生理学による女性の身体や役割に対する説明を、女性の権利擁護に結びつけて解釈し直した。神の存在を否定したとされるダーウィンの進化論であるが、著者にとって進化論は神の存在と矛盾しないものであった。近代科学の父と称えられるガリレオが自然を神によって数学で書かれた「書物」と考え、それを読み解くことが近代科学の役目と考えていたように (野家 2007, pp. 83-89)、ブラックウェルにとって〈科学〉の研究とは「純粹に量の問題であり、異なってはいるが正確に測定可能な項目

を比較」し、「いつかは実験によって判断が下され」る、「厳密な数学的検証」(p. 4 [本書の引用部分は頁数のみ記す])を用いる学問であった。彼女にとって科学とは、神の設計意思を明らかにするための信頼に足る道具であったのだ。彼女は、葛藤や困難を伴いながらも<正統的>な聖書解釈を離れ、<科学>を利用してフェミニズムと信仰を調和しようと試みたのである。

さらに、本書の出版の直接の動機は、「女性の問題 (Woman Question)」の論調が1870年頃より変化したことへの対応であった。「女性の問題」とは、19世紀における、女性の参政権や財産権などの法律上の不平等や、教育上の不平等の是正などをめぐる論争のことである (小川 2001, p. 186, pp. 202-203)。南北戦争後、女性参政権運動が高まりを見せ、さらに女性の高等教育進出が増加する中、ダーウィンの『人間の由来』(1871)や、スペンサーの『両性の心理学』(1873)は、進化が男性に有利に働くことを前提として女性の劣等性を主張している。医師でハーヴァード大学薬物学教授であったE. H. クラークは、『教育における性別』(1873)において、女性は月経時に休息しなければ健康を害すため、男性と同じ高等教育は受けられないとする「生理学的知見」に基づく主張をした。こうした権威ある男性たちは、<自然の差異>を根拠とすることによって、巧妙に男女の不平等を正当化しようとした。ブラックウェルは、そのことをきわめてはっきりと認識し、女性の地位に関する問題は、「予期せぬかたちで、純粋に科学的な評価や解決へと押し出されている」(p. vi)と指摘し、<自然の差異>の説明のされ方に異議を申し立てたのだ。

本書の構成は、「はしがき」と5編の論文からなる。冒頭の「性と進化」と「いわゆる成長と生殖の対立」の主要テーマはダーウィン、スペンサーの進化論における男性中心主義批判と新理論の展開であり、「性別と働き」、「『脳の形成』について」は、クラークによる女性の身体の生理学的解釈と教育法に対する反論となっている。むすびの「科学による試み」は科学的に性を考察する必要性を主張した短い論文である。

それぞれ独立の論文で長さもまちまちであるが、通底する主張は、現代のフェミニズム科学論にも通じる問題意識と進化論の独創的な新解釈である。

第一に、科学の客観性が狙上にあげられる。この場合<自然という書物>の読み手の先入観が問題となるのであり、著者は、「どれほど実証的な思想家でも、自分が確かだと思ふ観点からしか物事は捉えられない」と述べ (p. 5)、知識に関して、人間は絶対的な客観性を持ちえないとする。男性は先入観や独断によって女性や雌が劣っていると見なしているため、女性の立場からも論ずる必要があるのだ。ジェンダー・バイアスや、知識の社会的拘束性の問題を明確に指摘し、女性の経験をより女性の研究に活かす道を提案した。

第二に、何を科学の研究対象とするか、という問題である。女性の身体や歴史について、ほとんどデータがなく研究がなされていないとし、研究対象として真摯に取り上げ正当に評価することの重要性を訴えた。

そして、第三に、最も独創的で注目し値するのは、進化論における性選択理論批判から発展させた性的二形の新解釈である。ダーウィンは性的二形の起源を、雌をめぐる雄の競争と、雄に対する雌の選り好みという性選択にあるとした。かつ、ダーウィンは雄の優位性は雄の子孫に限って受け継がれると考え、スペンサーは雌は生殖に備え早期に発達が停止するとし、女性の劣等性を主張した。ブラックウェルは、もし2人の述べるとおりであれば、進化の過程で両性の不平等は拡大し続け、種が滅亡しかねないとした。ブラックウェルは、「下等生物から高等生物にいたるまで、同じ水準で比較すればつねに、それぞれの種の雌雄はまったくの等価」(p. 4)となっただけであるという仮説を立てた。著者に

よれば、「等価」というのは、発達やエネルギーの相対量が等しいということである (p. 4)。性的二形は、自然選択によって説明できる。有性生殖における差異は、食物の得やすさなど外部環境や、子孫の親への依存度などの条件に合わせて、それぞれの種で両性の機能の調和をとろうとする抑制の力をもつ自然選択によって生じる。主に「栄養を与える」という機能の観点から捉えると、子孫に対するそれぞれの親の役割はエネルギー量として等しく、栄養を胎内や母乳から直接的に与える、あるいは外部環境から食物を得て間接的に与えるという「機能の分担」(p. 26、強調は著者)をしている。雌雄の差異を拡大するような雄の第二次性徴の発達には、食物を得るという間接的な栄養負担を遂行できるように、筋肉量や脳の活動性を増やすためにある。あるいは、餌が取りやすい、または外敵が少ない環境によってその負担が少ない場合は、雄のエネルギーの余剰分は角や羽などの華麗な装飾物にまわると推測する。それらによって、雌の直接的な栄養負担と釣り合いが取れるようになるのである。性的二形は男女や雌雄の質的な優劣ではなく、子孫へ栄養を与える機能や負担の違いから生じるものであり、それらは量的にみて等価であるとする著者の解釈は、女性の機能や役割を説得的に評価するものである。

著者は、自然状態においては男女は差異がありながらも子孫に対する栄養負担が等価となっているはずであるが、因習や伝統的な教育が分業を歪め、女性に過度な負担を与え能力を抑制し、不平等を生じさせてきたとし、その改革を訴えたのであった。

進化論や生理学の男性中心主義を鋭く指摘し、女性が科学研究に参画することを鼓舞した本書は、19世紀におけるフェミニズムによる科学批判を生き活きと伝える格好の著書と言える。さらに、当時、ダーウィンの性選択理論はアルフレッド・ウォレスなど別の進化論者にも疑問に与されたことが知られているが(斉藤 2009, p. 287)、本書も性にまつわる進化の別解釈を提示していると言えよう。

最後に著者の限界を挙げるとすれば、多分に機能論で男女平等を主張するが、「女性はその本能によって子どものために考え行動することを優先し、自分を省みない」(pp. 87-88)など、たびたび本質主義的な表現が見受けられることや、「道徳力」など量的に捉えにくいものも比較の対象にしていることは指摘できる。しかしながら、機能の等価=平等であるという図式を論理的に打ち立てたことは高く評価できる。

本書の邦訳は、今後の日本における「科学とジェンダー」の研究に一石を投じるものではないだろうか。というのも、我が国において、「生殖技術とジェンダー」の研究は盛んであり多くの成果を生んでいるが、それ以外の「科学とジェンダー」という分野の研究者は少ないのが実情だからだ。そのような中でも、訳者の小川氏は、自らも生物学史研究者でダーウィン関連の著作も執筆している一方、早くから多くのフェミニズム科学史関連の著作の翻訳に携わり、海外の研究を伝え、かつ、日本も含めた包括的な著書を記した第一人者であり、また飯島氏は19世紀の女性知識人に高い関心を払っている若手研究者である。日本において「科学とジェンダー」の研究が進展し、さらには、主流の進化論史や生物学史研究においても、こうした女性論者の思想も十分に取り入れられ検討されることが今後ますます期待される。

(よこやま・みわ／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
ジェンダー学際研究専攻博士後期課程)

参考文献

小川真里子 『フェミニズムと科学／技術』 岩波書店、2001年。

斎藤光「生物学と性科学」 廣野喜幸ほか編 『生命科学の近現代史』 勁草書房、2009年。

野家啓一 『増補 科学の解釈学』 筑摩書房、2007年。

Murphy, Julien S. "Antoinette Brown Blackwell." In Mary Ellen Waithe ed. *Modern Women Philosophers, 1600-1900. A History of Women Philosophers*, vol. 3. Dordrecht and Boston: Kluwer Academic Publishers, 1991.